

此所より己午の方へ向ひ、伊勢の方を拜するなり。不動が窟として、ふるき石不動あり。一体には明應八年とあり。』とある。

ゴゼンダケ 御前岳 白山の最高峰で、絶巒に白山比咩神社奥宮があり、標高二七〇二米。附近は凡べて焼石の磊々たる不毛地をなし、僅かに地衣・蘚苔類の岩面に固着して一種の斑紋を現すと、岩隙砂礫の小區域に地衣を見るのみである。地質は角閃安山岩であるが、中腹以下は南方の別山と共に侏羅系の手取統から成る。御前岳を今地圖には御前峰と記する。↓シラヤマゴゼン 白山御前。

ゴゼンブギヨウ 御膳奉行 寛永八年渡邊清右衛門の命ぜられたのが始であらう。次いで十六年板津兵助、二十年河野四郎左衛門、明暦二年岡田五郎右衛門、寛文六年改田平左衛門が逐次命ぜられ、貞享以來は三人となり、以來連続した。藩侯膳部の職立は御膳奉行之を作り、御看板(漆板)に記して御近習勤仕の頭取に渡し、頭取は之を御居間に持参して讀上げ、仰出されを待つて御膳奉行に下附するのであるが、何の命もないのが普通であった。

ゴソウシワ 梧簾詩話 二冊。林藁坡著。文化八年から九年にかけて、著者は藩侯に隨うて江戸に在つた間に、唐・宋・元・明諸家の詩七十篇を摘出して評説を試み、作詩の用心と詩語の用法を述べたものである。大窪詩佛之に序を加へ、九年秋出版せられた。

ゴソウマンビツ 梧簾漫筆 大田錦城著。前編二冊。天道性命治亂興亡の事證を掲げ、己を修め他を治むる規則としたもの。文政六年江戸にて出版。その後編二冊は文政七年に

成り、三編二冊は天保十年に成つた。

コダ 小田 鳳至郡太田原の内の小字。

コダ 五田 鳳至郡久田の内の小字。

コダイカン 小代官 郡奉行の下に屬し、改作の手傳・山林・水利等廣範圍の任務に當つた。能登では七尾又は宇出津の御鹽裁許人に屬し、製鹽地に出張して事務を處理する小代官もあつた。

コダイニチャマ 小大日山 江沼郡の東南隅にある。高さ一一九九米。地質角閃安山岩。

コダキ 小瀧 鳳至郡阿岸郷に屬する部落。

コタシラヤマシヤ 古多白山社 鳳至郡大田原に在つて、文政の社號帳に古多白山大明神と載せられる。今の白山神社である。

コダチノ 小立野 金澤城の東南に續く丘陵地帯の名。一説に、源平盛衰記壽永二年の條に、木曾義仲が平岳野の木立林に陣取つたといふもの即ち是であらうといふが、木立林は地名ではない。又近古の詩人輩は小立野の文字を多く小龍野に作つた。↓コダチバヤシ 木立林。

コダチノユミノマチ 小立野弓ノ町 金澤の町名。藩政中持弓足輕の組地であつた。天和元年十二月八日奥村兵部から半田權之佐・小泉勘十郎宛の書翰に、『各組足輕屋敷並射場、小立野經王寺後に而願之趣入御覽候處、願之通可仕旨被仰出。』とあつて、この半田・小泉は持弓頭である。この組地は如來寺の方を如來寺組、經王寺の方を經王寺組といふたが、廢藩後前者を上弓ノ町、後者を中弓ノ町、又その次の横山同心組の組地を下弓ノ町と稱することにした。

コダチバヤシ 木立林 源平盛衰記に、『加賀平岳野の木立林に陣を取りて白旗を擧げたり。』又、『あの東に見え候森を木立林と申して、中に一の板堂あり。』など、ある木立林は、越登賀三州志鞆餘考に、廣岡山王の林のこととし、長享二年石川郡海濱の一揆がここに集つたのは、當時尙古への木立林が存した爲であらうといつてゐる。木立林を小立野とする説は、淺加久敬の道程記に載せた推測から初り、後人々に從ふものが多いが誤謬である。

コダナカ 小田中 鹿島郡小田中保に屬する部落。大永六年十月の一宮社務職年貢米錢納帳に小田中村が見え、文祿二年閏九月廿六日附長連龍が家土石寺喜右衛門に與へた判書には、『以小田中領家方之内參百俵扶持云々。』とある。

コダナカシンノウヅカ 小田中親王塚 ↓シンノウヅカ 親王塚。

コダナカハラヤマブン 小田中原山分 鹿島郡小田中保に屬する部落。もとは小田中の小字であつた。

コダナカホ 小田中保 鹿島郡に屬する。承久三年注進の能登國田數目録に、『小田中保、六町、建曆二年檢注田定。』とある。後世亦小田中保がある。

コダナカホ 小田中保 鹿島郡に屬し、藩政時代では小田中村のみを含んで居た。

コダニ 小谷 珠洲郡三崎郷に屬した部落。明治中に至り大屋に併合せられた。

コダニキウエモン 小谷久右衛門 祿八

十石を領して定番御馬廻に班し、元文二年四十九歳を以て歿。孫平藏信明の時、文政五年知行を召上げられ斷絶した。

コダニタダナリ 小谷允成 通稱義一郎。兵右衛門。享保七年父伊兵衛(二代)の遺知三の一を受け、九年本知百七十石に復し、改作奉行・本吉湊奉行を歴、安永十一年組外番頭に任じて五十石を加へ、六年御先簡頭となり、九年十月致仕して何成と號し、料二十人扶持を受けた。

コダニツグナリ 小谷繼成 通稱伊兵衛。諱は繼成。後に將軍の諱を避けて成之と改めた。字は勉善。號は廉泉。亭は竹醉。室鳩巢に學んでその高弟であつた。明暦三年十一月十九日金澤に生まれ、八歳にして父傳左衛門盛長を喪ひ、後祿百七十石を襲いだ。元祿十二年前田綱紀の女節姫が安藝侯淺野吉長に嫁した後、寶永二年繼成は夫人附となり、その江戸櫻田邸にあること前後十數年であつたが、享保四年五月老を以て暇を賜はつて金澤に歸り、翌五年八月二十日六十四歳を以て歿した。

コダニノフカタ 小谷信堅 通稱義一郎。兵左衛門。文化三年父左平太の遺知を受け、大小將・表小將・同御横目より次第に昇進し、天保十三年百石を加へて二百十石に至り、遂に御馬廻頭となつて弘化中歿した。

コダマイシ 小玉石 鳳至郡前波の海岸に打上げる石をいふ。能登名跡志に、『向の崎に諸橋の一本木として不思議の大木あり。云々。此木枯れしより、此所へ大石數多打上げて、今は數千に及びて山となれり。是を小玉石といへり。』とある。

コダマエン 兒玉延 大聖寺藩士。名は左源太、諱は延又は延年。兒玉仁右衛門雙の長子で儒士兒玉旗山の兄である。町奉行・寺社

知行を召上げられ斷絶した。